

鐵  
山  
宗  
鈍

古  
田  
紹  
欽



十六世紀から十七世紀にかけて妙心寺の禪に重きをなしたものに南化玄興、鉄山宗鈍がある。時の人は諺に「南化鉄山鳶鴉」と併せ呼んで、その名を識らないものはなかったという。

いま、この鉄山についていささか詮索したところを記そう。

延宝伝燈録の伝によると「窪田氏、甲州上条の人なり、幼より俊敏、本州慧林寺に上って剃髮得度、東谷に駿の清見に師事し、南化に洛の祥雲に参じ、策彦良に天竜に依る、学は内外に渉る」とある。

まず、この伝に記すところから吟味しよう。

鉄山の出生を窪田氏としていることは、鉄山がこの氏を「山僧家系也」（鉄山和尚語録）と自らいつていることによつて間違いない。上条は地名、現在地を当てることは恐らく至難なことではあるまい。鉄山和尚語録に地名として西条郷の名が見られるが、上条、西条は接近していた郷であつたであろう。

鉄山が何時、何才で出家したかはそれを明らかにすることは出来ないが、伝にあるように剃髮得度したのは慧林寺であつたろう。鉄山の父は武田の巨石坂筑後守次包の従者で、義雲寺の開基であつたというが（妙心寺六百年史）、父の縁で年少で出家するようになったものと思われる。正法山誌には鉄山の慧林寺受業に註記して、その受業の師を「快川国師歟」としているが、恐らくそうではなからう。甲斐国誌は慧林寺の栖松軒に住していた怡雲悦座元を受業師としたといっているが、この怡雲は怡雲宗悦ではない。この怡雲については後にふれよう。

「東谷に駿の清見に師事し」とは鉄山が後にこの東谷宗臬に嗣法して、師事したこと間違いないがそれでは鉄山が駿州の清見寺に行ったのは何時頃であろうか。東谷は太原崇孚の法嗣であり、太原は今川義元の崇信を受

け、駿州臨濟寺に住し、ついで清見寺に移り、州の善得寺を中興した人である。正法山誌によると鉄山はこの太原にも受業したといっている。臨濟寺は太原の師大休宗休を開山とし、太原はその二世となったが、太原はこの臨濟寺から天文九年に妙心寺に奉勅入住している（太原和尚語録）。この年、鉄山は十九才に当るが、鉄山が太原に就いたとすればその以前になることはいうまでもない。太原は清見寺に住して一百年来の荒廃を興しているが、（太原先師大和尚三十三回忌拈香拙語并序）その住持の間に従ったとすれば従ったことにならう。東谷は太原が清見寺から善得寺を興して住したその後をついで、清見寺に入ったものと思われるが鉄山が東谷に従ったのは、太原に就いたその直後のことであつたらう。この東谷の下にある時のことであらうが、永祿七年故有って一時遠州の平田寺に暫く止つたことがある。

ただ、鉄山がどうして慧林寺から駿州に太原、東谷の門を叩くに至ったかである。太原は今川の家族、庵原氏の出身であり、義元とは\*盟友で、義元を輔けて陣中にあること屢々であり、智略にすぐれ、この人が在世する限り、今川氏を滅すことは出来ないとまで諸侯の間に噂されたといわれる。武人の血をついだ剛腹な禅者であつたらしく、鉄山はこの太原を慕って参じたのであらう。

鉄山が剃髪得度したのは、鉄山和尚語録に「恵林堂上人和尚悉被悼書松軒主怡雲老師逝去」と見えているその怡雲である。この怡雲は語録に記しているように、元龜元年庚午五月十八日に寂している。恵林堂上大和尚とは快川紹喜のことであり、快川と怡雲とは旧知の間柄であつたらう。鉄山が太原に参ずるに至つたのは太原とこの怡雲との何等かの法縁によるものであらう。

ついで伝は鉄山が南化玄興に洛の祥雲寺に参じたといっているが、この記録通りとするとその年代は何時頃といふことなるうか。祥雲寺は天童山と号して秀吉が南化を住持に迎え、東山の麓、大仏殿の東南の地に創めた寺であり、今の智積院はその寺名を改めたものであるという。秀吉は天正十八年八月に子の棄君すくを失い、南化は棄君即ち祥雲院玉巖麟公神童の初七日の法要を妙心寺に営んでいるが（虚白録）、その棄君を妙心寺に葬って礎いた祥雲院が東山の祥雲寺とどのような関係にあるのであろうか。祥雲寺は南化の歿後、秀吉の門族であつた某藏主がついたが、その藏主が後に還俗して住持の席が空き、そのためにこの寺が真言宗に變ることになつたと伝える。南化は快川紹喜の法嗣でその門下に俊英を輩出し、寺門の興隆をはかりその道声はつどに高く、若くして妙心寺に勅住し、後陽成天皇に禪要を説き、秀吉を初め諸將の尊崇を厚くした英傑である。南化の祥雲寺住持はその晩年であつたろうことは、文禄五年八月二日、妙心寺塔頭養徳院の開基石川宗鉄の初七日忌を妙心寺に営んだ際の拈香語に「天童小比丘玄興」（刊本虚白録）とあり、豊国明神の石舟記に「慶長三年孟春吉辰、祥雲比丘玄興誌焉」（写本、同録）とあることから知られる。文禄五年は慶長元年でもあり、この年南化は五十九才、鉄山は六十五才である。因みに慶長三年には秀吉が歿している。祥雲寺建立は大方、天正の末年であらう。一体、この頃に鉄山が南化に参じたといふことが考えられるであらうか。「南化鉄山鳶鴉」とまで呼ばれたことからしても、南化と鉄山に師弟のような關係があつたとは思えない。延宝伝燈録が東谷に師事したことを述べているに続けて、鉄山が南化に参じたとしてゐることは正しくなからう。

天正四年四月に信玄の葬儀が行われたが、慧林寺住持であつた快川が導師となり、鉄山はその頃臨濟寺に、師の

東谷は信州建福寺にあったが来て鉄山は取骨、東谷は掛真をつとめている。鉄山が信玄に近かったことは鉄山和尚語録によっても知られるが、南化もまた信玄に近かったのであり、快川、南化、鉄山、信玄、慧林寺といった関係が結び合つて鉄山は早くから南化を知っていたであらう。南化は快川が信玄に招かれて美濃の崇福寺から移るに従つてゐるし、また相国寺惟高、天竜寺策彦の信玄への推挙があつて信玄の参禅の師となつたともいわれ（正法山誌）、鉄山が南化を知る機会は必ずあつた筈である。惟高は永禄十年十二月に寂しているから南化を推挙したのはそれ以前ということにならなくてはならない。延宝伝燈録が鉄山の「南化に洛の祥雲に参ず」といつていることは何んとしても解せない。若し「参」というならばこの頃、鉄山が南化と深い交りをもつた意味に解すべきであらう。

南化と鉄山との間に深い交りがあつたことは、南化に「和鉄山和尚成道韻」、「和鉄山和尚達磨忌韻」、「和妙心堂頭鉄山和尚歳旦韻」（刊本・虚白録）の偈があり、鉄山にも「慶長七寅祥雲南化住妙心歳旦和」（鉄山和尚語録）があつてはつきりしている。この慶長七年に南化が妙心寺に住したのは四住妙心であり、妙心寺住持歴の上からすれば南化は鉄山より遙に先輩であるが、「祥雲南化」と呼んでいる辺り、いかにも親しい間柄であつたことを偲ばせる。こういう関係は決して一時に成立したものではなからう。

次に伝に「策彦良に天竜に依る」とあることについてである。鉄山が策彦に詩偈の刪正を受けたことは鉄山和尚語録の一本に策彦が朱点を加えたものか遺存しており、鉄山が策彦に依るところがあつたことは事実である。その語録に収められている梅花百詠には序を、また梅を題する百韻には跋を寄せている。序には「永禄八稔乙丑鞠月廿有一日、前円党策彦叟周良」とあり、跋には「永禄八稔乙丑仲春廿五日、亀陰謙齋叟漫跋焉」とある。跋において

策彦は鉄山を評して、「公は壯歳より身自ら関山の鳥道に在って參請遑あらず、常に林際雲門の二宗乗の奥枢を窺ふ、加之、禪餘の吟も全く韓愈孟郊が四君子の雅作に越へたり、残香剩馥見ん可し」と述べているが、鉄山の語録を見て感ずることは文才に秀でていゝことである。伝が「学は内外に渉る」といつてゐるのはまことにその通りである。永祿八年は鉄山三十四才である。百韻は寒・陽の二部に別れてゐるが、寒のところは本寺妙心寺に於て作つた旨の鉄山の記がある。また、策彦は武田勝頼が駿州庵原に築いた城樓に觀国樓の名を付してゐるが、この樓上に掛けた鐘の銘を鉄山が書いてゐる。この鐘銘の成つたのは策彦の寂した年の霜月である。鉄山は策彦の最晩年まで親交があつたであらう。

南化もまた策彦と親交があつたろうことは、前述の如く南化を信玄に推挙したともいわれており、南化が元龜元年十月に妙心寺に初住した際は策彦がその山門疏を製してゐる（刊本、虚白録）。この南化がこれまた詩文に秀でたことはその語録虚白録が証してゐる。策彦は南化、鉄山より三十才以上も先輩であつたことを思うと南化、鉄山共に策彦と親交があつたというよりは親交を策彦より受けていたと見るべきであらう。策彦は天正年七六月に寂した。さて、伝は鉄山の学が内外に渉つたことを記したに続けて、更に次のようにいつてゐる。

即ち「後、粉邑を旋り、乃ち深山に入つて閉関禪坐し……」とある。ここに「後」とあることは鉄山が南化に參じ、策彦に依つて学問を修めたその後を思わせるような危険がある。伝は深山が何処であるかをいわないで、禪坐に際して毘沙門の化身であるところの一僧が来て修行を共にしたというような不思議な記事を載せてゐる。伝燈録の著者師蛮は何かの資料によつてこの伝を記したのであらうが、このような曖昧であつて不可解なことを鉄山に伝

えているのは奇怪である。

伝燈録に伝として年時をあげているのは、永祿の初めに東谷が妙心寺に住した時、師に従侍し参究を重ねて印記を受け、駿州の臨濟寺に住したこと、天正三年夏には妙心寺に住し、更に慶長三年秋には同寺に再住し、その間武州の平林寺に住し、再住妙心の翌歳には妙心寺の三門を修造したこと、最後に「元和三年十月八日化、寿齡八十六」と記していることにとどまる。

東谷の妙心寺奉勅入寺が果して永祿の初めであったかどうかは明らかでなく、この頃妙心寺に重きをなしたのは希庵玄密であり、希庵は永祿二年に妙心寺に住したときこれが三住であり、(希庵密和尚語録)五住まで重ねており、東谷の妙心寺入住は元龜三年(正法山妙心寺輪番年代記ノ書込)頃ではなからうか。鉄山は元龜四年歳旦を臨濟寺に迎えているが、この年に東谷の後をついでこの寺に住したものであろう。そうして東谷が妙心寺を退くと天正三年に妙心寺に勅住している。現存の鉄山和尚語録に妙心寺入住の語を欠くのは惜しい。

鉄山は同七年には臨濟寺に戻り、慧林寺殿の七周忌を三月十二日に営み、十一月には前述の勝頼が庵原郡に礎いた城塁の観国楼にかけた鐘の銘を誌し、また勝頼の敵命によってこの月武運長久の祈願文、即ち「奉伊勢天照太神宮之願書」及び「熊野三所権現之願書」を書いてゐる。同九年十月快川に大通智勝國師の國師号の特賜があつて賀し、同十二年から十三年にかけて同寺の方丈の建立、衆寮の普請を行っている。方丈は兵火に焼失したものであるが、その建立が同十二年十二月廿三日に成つて、

「山門近日普請、一拽石二搬土、満堂海衆苦屈不遑謝、珍重よ、謹問諸禪徳、古徳普請擲筵悟道、端的作麼



生、代達磨一宗掃地尽」

の語を唱えている。

同十四年歳旦に当って「山門改旦燈籠興露柱互爭年、諸人試甄別将来、代以一偈」すとし、「露柱燈籠共白頭、年々江寺祝禪流、南方仏法無多子、老去同参具眼鷗、久立珍重」とよんでいるのが、一山の衆僧苦屈によって伽藍の復興を見た歳旦の歡びはまた格別であつたに違いない。語録には歳旦の偈が同十九年まで続いて見られ、同十四年来鉄山の臨濟寺在住に成りなかつたであろう。十八年には大衆寮の衆が移つて新方丈に居したという記録もある。大衆が増加したための措置とも受け取れる。

この間、師の東谷は妙心寺を辞した後、建福寺に住したが清見寺にも居していた如く、同十一年には清見寺の瑞雲院に退き、同十四年には善得寺に住している。善得寺には東谷と同門の景筠玄洪が住していたが、天正三年八月に寂している。正法山輪番年代記によると同十七年に鉄山は妙心寺に再住したことになるが、語録の上からはそれを明らかにすることが出来ない。

文禄になつても鉄山は依然として臨濟寺にあつたが、同三年一月東谷が寂し、八月には臨濟寺方丈において先師のために設齋している。同五年一月十五日はその三年忌に正当しているが、この前年十二月末から下総多故(胡)の少林寺に赴いていて、ここで忌日を迎えている。この少林寺にあつては歳末から歳旦にかけて尺余の降雪に遇い、雪の詩をよみ、人から寄せられた詩や歌に和している。

慶長三年妙心寺に重ねて住しているが、語録はこれを再住としている。歳旦に際して妙心寺において一亩や伯蒲

の詩に和しているところを見ると、その前年に上洛していたであろう。「慶三本寺再住時」としているものに仏成道の偈があり、「慶長戌本寺再住之時」としているものに達磨忌の偈がある。上記、南化の「和鉄山和尚達磨忌韻」はこの達磨忌の偈に対したものであり、「和鉄山和尚仏成道韻」は次に示す仏成道の一偈に対したものである。

昨夜雪山騰雪堆 瞿曇眼裡冷於灰

三生因果殺風景 唯見明星不見梅

これよりさき、この年八月二十四日は本光国師大休の五十年忌に正当し、妙心寺靈雲院にあってその香語を唱えている。

翌四年歳旦を妙心寺に迎えた。鉄山和尚語録に歳旦の年時を明記しない「歳旦上堂之拙語」は、この時のものであることが知られる。その全文を次に掲げよう。

歳旦上堂之拙語

祝聖

大日本国山城彦平安城正法山妙心禅寺住持伝法沙門宗鈍、改旦令辰謹焚宝香、端為祝延今上皇帝聖躬万歳と  
と万々歳、陛下恭願

始皇正月 雨養花、徳養賢

文王元年 露徧埜、思徧衆

索語

天得一以清、地得一以寧、舉弘云、箇雪髻翁得一以說法、諦聽よと參

提綱

這臨濟金翅鳥王、鶻然燈清淨法身於記前時碎啄、翼如來涅槃妙心到拈花咲翹翹、悟之者、声前百喜鳥、觀跡成文、柳絮池塘淡々

迷之者面上兩惡鳥、倦飛知還、落花流水茫々

爾來抱少林卵、產出虎踞竜蟠活衲子

果然養曹溪羽、扶起鯨窟羅寂阿練孃

百丈得之為野鴨、以機先會取

園悟得之為晨鷄、以直下承當

領多衆則堂中首座立雪白鷺、接四來則室內待者出谷黃鳥、咄々々、全非李謫仙吉了、別々々、又非柳子厚畢方、元是閩山玉鸚鵡、看來靈雲全鳳凰、

雖然如此亦作羽虫見解、總是籬下斥鴳、錯莫昧向上商量、粵堂前露柱出來作太平雀舞云、祝々賀正一曲子如何舉揚去、弘一弘云、倒把一枝無孔笛、等閑吹起燕版梁

自叙

宗鈍、鈍鉄入爐鞴、轉輾委泥塵、嗚呼汗顔々々

謝語

上堂之次共惟、祥雲堂塔大和尚各々諸位堂頭大和尚、師々祖々、正法明王道照、四海人天白日、老々尊々妙心菩薩、宗猷千歳濁世烏曇、慈悲尊亮

## 次惟

山門両序、適來禪客、一会海衆、諸位禪師

春風吹天、香梅一方、勝利夜月隨行道、檀林四衆禪棲、嗚呼盛哉々々

## 拈提

記得成都真禪師、歳旦上堂拈拄杖云、看々諸人既不相顧不免乘六牙香象、直入五台山与文殊師兄賀歳去矣、

山僧不然、唯坐与床角拄杖子賀歳了、打一偈祝新歳君云、烏藤拍手叫令辰、五百僧房万物新、東序歌花西序月、

山門起舞洛陽春、久立珍重。

この歳旦の語が慶長四年歳旦とされるについては、幸に正法山誌に鉄山がこの年三月妙心寺山門の造営を畢ったことを記録している一文があり、それによって確証される。山誌に「鉄山和尚住山時、山門造営始成、歳旦作偈曰、烏藤拍手叫令辰、五百僧房万物新、東序歌花西序月、山門起舞洛陽春、于時慶長四年己亥三月造営功畢、蓋預歳旦祝之也」とあり、「歳旦上堂之拙語」に見られる偈は慶長四年の作であることを述べている。

鉄山が同四年涅槃会の後、三月はまだ妙心寺にいたことはこの正法山誌の記録によっても知られるが、「花庭理芳大師」の肖像に贅したものに「慶長四亥仲呂初三日住花園鉄山老衲涉觚」（鉄山和尚語録）とあることによっても

知られる。

同五年歳旦には既に鉄山は臨濟寺に帰っているが、同七年春には妙心寺靈雲院に来ており、この頃は妙心寺と臨濟寺との往還が屢々であった如くである。

鉄山に「慶長七寅祥雲南化住妙心歳旦和」のあることは前にふれたが、南化の仏成道の偈「三界独尊何独尊、出山成道累<sup>ノ</sup>兒孫、蓬頭垢面雪团打、影瘦<sup>ノ</sup>梅華、月一痕」（虚白録）に鉄山が和して一偈をよんだのは、同六年の仏成道日であり、六年から七年にかけてのある期間、鉄山は南化と妙心寺で出会っているのではあるまいか。南化の妙心寺勅住は正法山妙心寺住持輪番年代記によれば同六年としている。

同八年、九年と鉄山は歳旦を臨濟寺に迎えているが、八年の歳旦偈に「同八卯従本寺下向之翌年於林際」と付記していることからすると、八年が下向の翌年とあるように同七年には妙心寺から臨濟寺に戻っている。しかし同九年には妙心寺住持の輪番年代記にもあるように鉄山は妙心寺にまた住している。このことは鉄山和尚語録にこの時鉄山が靈雲院に居たことを記していることから知られる。南化はこの年五月二十日妙心寺鄰花院に寂したが、鉄山はこの年六月には既に妙心寺に来ており、このことは南化の示寂と無関係ではなからう。同十年も続いて妙心寺に止っていた如くであるが、同十三年の仏涅槃會には妙心寺に居した。屢々引用する輪番年代記には同十二年妙心寺住としており、この年より翌年にかけて重ねて住していたものと考えられる。鉄山和尚語録に「慶長十三年戊辰本寺和」と付記している涅槃會に際しての一偈が見られる。鉄山はこの後は臨濟寺に帰ることなく、妙心寺に大竜院を構えて老を養ったものと思われる。鉄山が満八十歳と書している墨蹟に大竜室中とあることからすると、この

後間もなく大竜院を構えたであろうことが推定される。

延宝伝燈録に東照源君が幼より鉄山を識っていて、招いて武州の平林寺に住させたと言っていることについては、「受東八州都督垂相公之堅請、住武之金鳳山平林神(禪)寺之拙僂」があり、その僂末に「天正二十年壬辰六月五從駿林際赴于此」とある。家康が幼より鉄山を識っていたかどうか疑わしいが、正法山誌に家康が鉄山に問道し、鉄山を崇敬すること無雙であったとしている。また鉄山が妙心寺に住して二条城に家康を訪ねたとき、次のような問答のあったことを伝えている。

「公曰、我聞仏以弘法付嘱有力檀那、今日我朝有力者、莫加于某、請為妙心為檀越矣、山曰、所謂有力者、非公之所言、非公之所測識、若有得弘法、有力者者、則山僧可展坐具礼拝、夫弘法、有力者、障裡之僧、亦未可知也、時伝長老在障内、山預知之耳、是時家康公為檀越、則以京城西洞院以西嘱妙心、山峻拒不奉旨、其意謂法、道凌遅依富奢也、僧家淡泊可住持弘法矣、方今覽東叡山日光等世榮、可知鉄山永計也」

若しこれが事実とすれば、二条城の造営は慶長七年に始り翌年に完成したと云われるから、それ以後のことであることはならない。

延宝伝燈録は鉄山が平林寺に住した期間の幾くもなかったことを云っているが、語録に「天正二十年壬辰八月廿三日住武之平林寺之歴観也」と註記している「湘南道中之口号」、八僂がある。この年八月金沢から鎌倉をめぐる、下野の行道山まで歴遊している。ついでにここにその八僂を挙げておこう。

金沢風景

古來此、景世名高、万水千山天下、豪、中有白鷗、後、素、画工何事、誤揮毫、

金沢、文庫

不見群書万卷堆、秋風荒野独堪哀、秦坑千歲非、忝恨、帙雜經塵軸、綠苔

建長寺開山塔西來庵 開山大覺禪師自大明、西蜀來、立法幢之靈地也、法界門額天下禪林存于今、

曾將大法度群生、天下禪林空有名、欲問西來旧公案、樓鐘臥月聽無声

円覚寺開山塔正統庵 即開山仏光國師唱法之道場也

殘僧一二竹篔簹間、纔閉柴門無往還、正統万年言在耳、松風不改四時山

鎌倉八幡 維持吾朝、聖將軍出帥於大明、突將已建、纛旗於朝鮮國之中城云也

武家、鎮護八幡宮、靈鑑高輝日本東、神德今猶、磨異域、大唐四百絳旗、風

下野国足利学校 久虚、講主席、滿院青苔黃葉耳、感慨太多者也

露宿風凜數十程、客衣行尽、入村費、青灯半盞無入學、月落講堂鐘一声

行道山 開山法徳禪師已及三百三十也

久伝、行道、古禪場、墳水繞山、悵、素聞、暫借僧房、飽高臥、百年世事半閑、雲

又

山と深鎖、旧僧房、岩下雲閑、眠石床、二百年來行道、桂、秋風一枕覺猶香

流石はこの人が学僧であつただけに金沢にあっては金沢文庫を、下野にあっては足利学校を訪れている。更にこの歴観の後、時日は記していないが二、三の友と武藏の兜率山廣園寺に遊び、ここでも一偈を賦しており、常陸の鹿嶋宮にも行つてゐる。平林寺に住することは幾くもなかつたと云つても湘南の地を歴観したその前後数カ月はこの寺に住してゐたであらう。平林寺は鉄山の後、弟子の石門がその後をついでゐる。語録の聯句のところに、文禄三年二月廿三日にはこの平林寺にいたことも記しており、その後もこの寺を訪れることがあつたものと見られる。

また鉄山は建福寺が会津に遷らず信濃にあつた時、この寺にも住したとも云う。師の東谷が住持した後であらう。会津の乾(建)福寺は鉄山の法嗣江宗珊を開山としてゐる。

鉄山の法嗣は正法山宗派図に密宗宗頭、了室宗密、雪堂宗瑜、千巖玄呂、大室祖丘、綱宗宗安、それに劍江宗珊をあげてゐるが、鉄山の法孫が太原の門派の有力な一流をなしたことは確かである。

鉄山は元和三年十月八日、八十六才の高齢で大竜院に寂した。正徳四年、中御門天皇より靈光仏眼禪師と勅諡された。この鉄山を知る資料としては未刊の鉄山和尚語録が未整理のまま僅に伝写されて遺つてゐるに過ぎないが、



この人のことはもつと世に知られなくてはならない。

\*本朝高僧伝、延宝伝燈録に太原を今川氏親の子とするは誤っている。このことは既に辻善之助著「日本仏教」史中世篇において指摘しているが、東谷の「宝珠護国禪師太原先師大和尚三十三回忌拈香拙語并序」に詳しい。